Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-24

『魔風恋風』論 : 二人のヒロイン

天野, 勝重

(Citation)
国文学研究ノート,36:13-23

(Issue Date)
2001-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012342

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012342

『魔風恋風』論
――二人のヒロイン――

天野勝重

はじめに

小杉天外の『魔風恋風』（「読売新聞」明治三十六年二月二十五日～九月十六日）が尾崎紅葉『金色夜叉』（「読売新聞」明治三十年一月一日～明治三十五年五月十一日）終了後の「読売新聞」の販売不振を振り払い、大ベストセラー小説となったことは周知の通りである。

鈴（ベル）の音高く、現れたのはすらりとした肩の滑り、デートン色の自転車に海老茶の袴、髪は結流（ゆいなが）しにして、白リボン清く、着物は矢絣の風通、袖長けれど風に靡いて、色美しく品高き十八九の令嬢である。（「記念会」）

主人公萩原初野のこの登場シーンは、梶田半古の挿絵とともに読者に強烈な印象を残した。そしてそれと同時に

「ぢやァ……。」と東吾は呆気に奪（と）られたやうに初野を見詰めたが、急に聲を喘（はず）ませ、「ぢや、僕の望を叶へて呉れますね？」と柔な手を握つた。

「それは、もう……。」と顫へて、口も碌に利き得ぬ。

「初野様、本当ですか！」

「え、ま、何卒お離しなすッて、誰か見ると可けませんから。」

東吾は手を離したが、往来の前後（あとさき）を見廻して、初野の脣（くち）を我が物にした。（「わかれ」二）

というような描写は「青年男女の読者を悩殺せしめた[1]」わけだが、それだけに読者、批評家の反発も大きく、

抑自然主義とは何ぞや、即ち自然其ものを一毫も修飾せず赤裸々に描写するなり。茲に於てか、姦通の現状も手に取る如く写さるゝなり、醜業婦の魔窟も写真の如く公表せらるゝなり。（中略）彼の一代の姦淫書『魔風恋風』は、斯くして多くの無垢なる少女を汚し、純潔なる少年を堕落せしめたるにあらずや。

（「自然主義の弊」「新潮」明治三十七年十月　傍線引用者以下同じ）

という論に代表されるように、『魔風恋風』は「姦淫」の書であり、それを読むものは登場人物と同じように堕落していく、

と世間は見ていた。その最たる例としては、明治四十年に帝国図書館が『魔風恋風』の閲覧を「誨淫」との理由で禁じることになる。そのことについて島村抱月は以下のように述べている。

頃者新聞紙の報ずるところによれば、我が帝国図書館は小杉天外氏の小説『魔風恋風』の閲覧を禁じたといふ。（中略）第一『魔風恋風』は果たして青年読者の人格を毒するものであらうか。誨淫といふことが此の書の批難の理由と聞いた。併し若し単に恋愛を描くといふ事、乃至其の恋愛の描写が読者をして実の恋愛の快楽を想望するに至らしめるといふ事を以て直ちに誨淫と名づけるのであるなら、それは由々しい癖見であらう。

（「禁閲覧の文学」島村抱月　「早稲田文学」明治四十年七月）

抱月の論旨そのものはここでは問題ではなく、重要なのは完結してから四年経ってなお『魔風恋風』が風俗的に影響を持っていたということであろう。

では一体なぜ『魔風恋風』がそれほど読まれたのか。そのキーワードとして「女学生」と「堕落」があることはこれまでの研究で明らかにされてきたとおりである。[2] だがこれまでの研究論文では当然の事ながら「堕落」した「女学生」萩原初野に焦点が絞られていた。しかし『魔風恋風』にはもう一人「女学生」が登場している。そこで本稿はまず「女学生」というカテゴリーについて論じた後、萩原初野と夏本芳江という二人の女学生の関係に焦点を当てることによって新たな視点を提供したい。

一　「女学生」ということ

主人公である萩原初野は帝国女子学院の学生で、夏に卒業試験を控えている。また同級の三浦絹子の紹介に「初野と同じ文科の三年生で」（「意外」三）とあるので、帝国女子学院は三年制どわかる。初野は下宿をしており、そこは「二三名の外は、悉く女子学院ならぬ名も聞えぬ女学校の学生、それから外の職業に転じようとして居る看護婦、産婆、まだ給料に有付かぬ女教師、始終医師に通う子宮病患者」（「下宿」）などが住んでいる。この下宿の人員構成は非常に示唆的である。まず「名も聞えぬ女学校」とあるが、これは明治三十二年「高等女学校令」によって各府県に女学校を設置することが命じられ、その結果「明治三十一年に八千五百八十九名にすぎなかった全国の高等女学校生徒数が、三十六年末には三倍近い二万五千七百十九名に急増」（槌田満文『明治大正の新語・流行語』昭和五十八年六月　角川書店）した影響がある。その一方「まだ給料に有付かぬ女教師」は、初野の学校は皇后が来るほどの名門であり、初野自身も優秀な成績であることから一概には比べられないかも知れないが、初野の目指す未来が必ずしも確実なレールに乗った、安泰なものでないことがよくわかる。実際、作中でも初野の妹お波の奉公先の金村の妻は「女子学院第三回の卒業生で、席順も二人目で、優等で、賞与さへ貰つた事」（「よわり気」四）

さえある優秀な人物でありながら、普通の主婦として生活している。ここからも初野の将来は決して職業的に開かれたものでないことが明らかにされている（それが幸福かどうかは全くの別問題であるが）。

「千葉県香取郡佐原町平民、学生、萩原初野」（「病院」一）

これが初野の作中で与えられた肩書きであり、初野はこの肩書きから抜け出すことが目的だったわけである。当時は東京高等女学校の創立者兼校長の棚橋絢子を代表とする「女子教育家」が注目されていた。金井景子は

『女学世界』では前年に当代の女流十二大家を読者に問うという企画が進められ、明治三十五年一月五日の号に、その結果が「女流十二大家投票披露」として掲載されている。（中略）中でも教育家には最も票が集中し、一位が棚橋絢子（一六二七票）、二位が三輪田真佐子（一三三三票）、三位が跡見花蹊（八四三票）、となっている。三者ともに『女学世界』の常連執筆陣であることも無論、影響しているだろうが、教育家が女子に開かれた職業の中で、学問を活かして上り詰め得る頂点として、読者の羨望を集めていたことは間違いない。

と指摘する。[3] 初野にとっても当然ここが一つの頂点となる。そしてそこへの到達は、先に述べた未来の不安定さとは裏腹に、郷里の母と妹を義兄から救うため、また「昔罵られた兄や嫂、母の素性まで洗立てゝ嘲つた近所の人達にも、慚死の感を與へて遣らう！」（「まよひ」）という決意をした初野には絶対に必要なことであったし、優秀な自分にはほぼ約束された道でもあるように感じていたであろう。

東京へ出て女学生になる、そこに地方の女子がいかに多くの夢を抱いていたか。『魔風恋風』とほぼ同時期の広津柳浪の作品である『都の夢』（「文芸倶楽部」明治三十七年七月）にも、主人公松乃が東京から避暑にやってきた大学生に、

松乃さん、今日の世の中はね、親は縦令何者であらうとも、当人の力量次第では、何様幸福な身の上にでもなれるんだ。僕なぞが学問するのも、結局は其為なんだ。松乃さんにして云つて見ると、学問が出来て、東京の社交の応接にでも熟しやうものなら、容色は佳いし、何故立派な人の細君にでもなれるんだが。

と東京に出ることを勧められ、

自分が、夢にでも東京で学問をされる身の上であつたら、猿渡さんのお云ひなさる程にはなれずとも、其十分一の出世でも出来ればと、空想ながらも、前途に何となく希望が見出されさうに思つて居た

と東京に対しての憧れが一段と強くなっていく心情が描かれている。[4] 妹のお波が東京に来るのも単に逃げてきただけではなく、女学生になるという意図も大きかったことも併せて指摘できよう。そうした点で、初野は一つ目のハードルをクリアしたと言えるだろう。

しかし明治三十年代の女学校は「学問」を為す場より「良妻賢母」を育成する意味が強かった。作中でも「女の学問なぞは

出来ても出来なくとも何うでも可い、結局は芳江をば此のまゝ退学させても、東吾には一年でも若い妻を有たせ度い」（「子爵の養子」七）と芳江の両親の気持ちが描かれている。また「女が学問して何に成るんだ…？」（「下宿」）という殿井恭一の発言にもそれは表れている。当時、女学校のカリキュラムが男子のそれと比べて家事・裁縫・修身等に多くの時間を割いたものであったことも指摘されており[5]、殿井の発言もこうした事実が背景にある。また義兄の「女の学問なぞ知れたもんだ、今に男でも拵へて、私生児でも産むくらいなものさ」（「同胞」二）という言葉から分かるように「女学生」と「堕落」とはいとも容易く結び付くものであった。初野も常にその視線にさらされているし、「堕落」へのきっかけは至る所に散りばめられている。初野を十九才という、学齢としては中途半端な、しかし結婚するには適当な年齢にしたこと[6]、また田舎からはぎりぎりの生活費しか送って貰っていないはずなのに自転車に乗っていたりすることも、そうしたことの演出であろう。そしてその「堕落」と初野の結びつきを更に強固なものにしているのが、

目の大きいね、鼻の高い、色なんぞは、宛然透通る様なのよ。

（「病院」一）

初野の美しさを、珍しいのか、忽ち道を行く人の二三が立止って

（「子爵の養子」八）

などと形容される初野の美貌である。しかし物語中で初野の美しさに皆が感動する場面はこのほかにもいくつもあるが、学問の優秀さ、知性に感心する場面は一度もないのである。それは「女学生」のうちの「学生」の部分は誰も重きを置かない、つまり初野の学問がいくら優れていてもそれは初野の持つ「女」としての美しさに太刀打ちできないということである。そこに初野が目をつぶろうとすればするほど歯車は狂っていくことになる。

一學生の為に、校長から病氣見舞などの來た事は、全く前後に例の無い事である。初野も意外なる贈物に、受けて可いものかと暫く躊躇したが、楠田は、是と云ふも貴女の成績の優れたのと、品行の正しいのが學校の内外に知れ渡つているので、一はそれを賞する為、一は他の學生を奬勵の為に贈られたのだから、無論大威張りで受けた方が宜い、

（中略）

校長からの見舞と云ひ、殿井の言と云ひ、思合すれば、此の身は最う他の耳目を惹くだけの、賞讃を博するだけの學力…、品行…、其様な資格を具備して居るのであらうか？未だ世間へ出ない前から、未だ學生である中から……？何も夢の様である、其様な理窟の有らう筈はないが、併し證據は愛に二つ迄も出て居るのだ。

（「意外」二）

この場面などは一見初野の学問を認められたかのように受け取れるが、校長から初野への見舞は初野に好意を持っている女教師楠田からの働きかけであることは言うまでもないことであるし、殿井の言葉（「貴女の様な有望な方」云々という台詞が「入院料」にある）も初野を籠絡するための方便であることも読者にとっては自明のことである。しかし初野はこれらを自分は既に世間に認められた存在である証拠と考えてしまう。そし

てその自意識は何が何でも卒業試験を受けなければという脅迫観念じみたものへ変化していくのである。

初野は自らの「美」に価値を全く見出していない。初野にとって己の価値は「学問」以外に無いのである。その為初野は頻りに他の女学生との違いを強調する。例えば先生に転宿を勧められた時

詰り我が志操が弱く、誘ふ物あれば堕落もする様に断定されて居るやうで、初野は耐へがたき侮辱を感ずるのである。

（「意外」三）

と悔しがるが、己の「学問」に対する他者との差異は世間的には全く認められておらず、初野がいくらあがいても「女学生」、さらにはその延長線上にある「良妻賢母」という範疇からは逃れられないのである。尤も『魔風恋風』の連載と全く同じ明治三十六年に平塚雷鳥が高等女学校を卒業しており、後少しで違う選択肢を持ち得たのであるが。

二　二人のヒロイン——初野と芳江

初野は物語の最後で「脚気衝心」によって死んでいく。ヒロインの死そのものは『不如帰』の浪子に代表されるように特に目新しいものではない。しかし、この初野が死んで親友の芳江と婚約者夏本東吾が結婚するという意味をもう少し掘り下げて考えるとまた違ったものが見えてくる。

初野や芳江が通う帝国女子学院は「在学生は常に千名に近く、其の基本金は五十万円、器械の具備した事から教授方の整頓した事、卒業生には多くの名媛を出して、最早東洋屈指の大学校」（記念会）である。そして初野は皇后の前で「英語の戯曲を朗読」するはずであったほどの優秀な生徒であった。また、入院している病院の看護婦にまで噂されるほど美人であることは前章で触れたとおりである。しかし作品を詳しく読んでいくと、初野は決して美しく成績優秀な女学生というだけではないことが分かる。そこには旧来のヒロインが持っていた資質、〈素直さ〉若しくは〈しとやかさ〉のようなもの、が欠けているのではないだろうか。

お波は、昨夜計りは心底姉を怖い人と思つた

（「大決断」一）

と言うお波、下宿の主婦の

「だッて、彼様な強情な、彼様な意地悪な、愛想氣の無い人つて在るもんぢゃありません……。最う最う真平、本当に真平」

（「よわり気」二）

という台詞、また女子学院の楠田先生の台詞

「意志が強くなきゃ誘惑に勝てないッて云ふけれど、それぢや、餘まり強過ぎるぢや無いかね……。此様な可愛い顔をして、本當に顔にも似合はないよ」

（「意外」二）

更には同級生の三浦絹子にも

絹子の觀察した所では、此の萩原初野と云ふ人は、他で評判のやうに只だ美しい、只だ温和しいで無く、心の奥の中には、男兒のやうな確乎した思慮を蔵つて居る人とは思つ

て居た、けれども、斯うまで情の強い、斯うまで思切つた事を口にする人とは思はなかッた。　（「質屋の門」）

と身近な人間ほとんどに言及されているように、殿井や芳江の父に肉体関係を迫られた事件をきっかけに初野は自立心を常に意識するようになるため、段々と気丈な我の強い性格になっていく。特に最後の「遺書」の章での

「…然うとも、最う斯うなれば義理も友誼も有りァしない…、嫉妬ると云はゞ云ふが可い、私だッて、他人の為に生れたんぢゃあるまいし、散々感情を玩弄ばれて、彼方の都合で抛出されて、それでも徳義を守って従順くして居るなんて、其様な義務は有りァしない、無いとも、其様な義務が有って耐るもんか、機械ぢやあるまいし、奴隷ぢやあるまいし、私だッて一個の人間だわ、教育ある婦人だわ、彼の人達の戀を遂げさせる為に生きて居やしないわ…、然うとも、最う構ふもんか、何うなッても構ふもんか…。」

という台詞や

今頃は、東吾は自分の不在を訪ねて、前の植木屋から様子でも聽いて居るであらうが、此の侭私が歸らずに居て遣れば、芳江を探る手懸も無く、綺麗に請合つた言葉の手前としても、養家に申譯ない事となるのだ。

「あゝ、本當に好い気味だ！」とまた嘲笑つたが、このあたりの初野はとても同情すべき弱い性格として描かれていない。

これに対して芳江は

さて顔を見ると、何と無しに気が更まッて、舊のやうな親い言葉の出ないのが此る場合の例であるのを、芳江のみは、その言にも舉動にも、些も其様な影が見えない。影が見えぬのみか、舊より反つて親く、反つて隔がなくなッて居る。その上、初野をも自分と同じ意と信じ切つて居るらしく、兎もすれば更まりかゝる初野の言をすら、怪みも疑ひもせぬのである。

「神様のやうな心とは、本當に芳江様のな人を云ふんだらう！」　（「自炊」二）

と初野が評するほど、純粋で思いやり深い人物として描かれる。芳江のこうした性格は、本来は初野にこそ付随するべきものではないだろうか。これは初野だけではなくて、芳江にもヒロインの性質が与えられていることを意味する。初野一人をヒロインと見るよりも、芳江と一対で、コインの表と裏のような感じで捉えるべきである。だから

「（前略）私はね、義姉様、私はね、」と急に初野の手を握って、「これでも、貴女を姉様だと思ってるのよ、口頭許しぢや無いの、真実姉様と思ってるの……、何様な事が有っても、もう決して此の誓は破らない心算よ、死んでも破らない心算よ！」

「それは、私だって芳江さん……。」

「妹にして呉れるでせう……。何卒ねえ、一生見棄てないで下さいよ、ね、ねえ姉様？」と綺麗な手に力を籠めて、

「更めて、今日から誓ってよ。」

「え、私も誓ってよ！」　（「子爵家」三）
「兄様まで其様……。初野様は、私の親友ですもの……。私は……、未だ兄様には黙ってましたけれど、私は、」と涙を拭って、「初野様と、私は姉妹の誓をしてますもの。」
「姉妹……？」
「然、義姉妹ですの。」　（「許嫁」四）

こうした「義姉妹」という初野と芳江の関係も、同性愛的なイメージを喚起する為に作中に存在するのではなく[7]、彼女達のそのつながりを表す記号として存在する。そしてその表裏一体の結び付きは一枚のコインが同時に表を出せないのと同じく、最後に二人の将来を違うものにしてしまう。つまり彼女達に与えられたヒロインの資質は決して同質のものではないのである。

（芳江は　引用者注）未だ式こそ挙げないが、一旦心に誓つた夫を捨て、私は知らぬ夫を有つやうな悲い身には成り度く無い、と泣くのである。　（「仮病」）

芳江のこの発言は旧来のヒロインに求められた資質の一つ、もう少し正確に言えば、男性主人公が女性に求める資質の具体例の一つである。そのことは『浮雲』の内海文三とお勢、『金色夜叉』の間貫一と鴫沢宮の関係を思い浮かべるとよく分かる。文三や貫一がお勢やお宮に求めた物こそまさにここで芳江が述べたことなのである。

芳江は東吾との不和を解こうとひたすら努力し、死まで決意する。その結果初野を改心させ、東吾と結婚する。この初野と芳江、二人の差異というものは、例えば『己が罪』（「大阪毎日新聞」明治三十二年八月十七日～明治三十三年五月二十日）と読み比べることによっていよいよはっきりする。「読者は主人公環に同情を表するの余、殆ど狂するが如く、（中略）中には環が愛児を失へる一段を読みて、徹宵泣き明かせり」（「新小説」時報欄　明治三十三年五月）と書かれたとおり、『己が罪』の主人公環に読者の同情は集まっている。物語の最後、環の夫桜戸子爵が己の間違いを悔い、和解する場面を以下掲げる。

「（前略）環さん、どうぞ私の罪を許して下さい。」
環はたゞ俯むきて聞きてありしが、万感胸にせまり来て、先立つものは涙のみ、良人の手首にはふりおつる幾点の雫を拭いもあえず、
「妾は…このような嬉しいことはございません…。」
（『己が罪』後編第六十七）

この〈男性側の懺悔とそれを許して和解する女性〉という場面に重なるのは芳江と東吾の組み合わせであって、決して初野と東吾ではない。つまり最終的にヒロインとしての幸せを掴むのは芳江の方になるのである。

初野の方にもう一度視点を戻すと、初野の行動は「えゝ、私は何うでも貴方の御意見通りに成るんですわ。」（「わかれ」二）という初野自身の言葉に端的に表れているが常に流動的である。物語を牽引することは殆ど無い。その初野が初めて主体的にやり遂げようとしたことが最後に一つだけ有るが、それは先に挙げた、東吾と芳江を会わせないようにしようとしたことである。それは初野の新しい可能性、高田知波が

夫に対しては「賢さ」を発揮しない「貞淑温良」な妻に終始することで、天皇制国家のモデルとしての「家」の安定を支え、子に対しては私情におぼれない「賢さ」を持った母として機能することで、「家系」の存続と「臣民」の育成に献身する……この二重の役割の措定によって、自立的存在への道を封殺したまま女性に国家的「有用性」を要求したのが、明治三十年代の「良妻賢母」のイデオロギーだったのである。

と指摘した[8]「良妻賢母」が理想とされ始めた時代に、単に女学生としてだけではなく漱石『三四郎』の美禰子のような自由奔放な生き方をする女性にまで連なる可能性であった。ここで初野は旧来のヒロインの枠、芳江が貫き通したものから飛び出しかけているのである。しかし、芳江の遺書によって初野は改心することで芳江にイニシアチブは移り、初野は枠の中に戻されてしまうわけである。こうして初野は新しいヒロインに成り損ねる。つまり、新しいヒロインの要素を持った初野と、旧来のヒロインの要素を持った芳江の二人がこの作品のヒロインであり、初野は新しい女の要素を持ちながらも、その可能性は否定され、逆に芳江はその枠の中に留まり続けることで幸せになり得たのである。

三　「大学生」夏本東吾

「有難う、ま、お酌しませう。私は此の頃は禁めて居ります。」

（「子爵の養子」四）

という台詞からもわかる通り、東吾は物語の最初の頃は酒を飲まなかった。また飲もうと思った時も、「試験を目の前に控へて、其様な無鉄砲な事も出来まい……。」（「子爵の養子」八）と自制していた。この「禁酒している」云々という台詞は東吾の兄、多額の借金を抱えて逃げ回っている東一に対してであり、〈人生に失敗した人間〉という印象を与えるために兄には酒を飲ませているのである。またその兄の口からも「酒は止した方が良い、何うも頭脳が悪くなッて可かん。耐忍力が衰へる、気力が弱くなる。何うも可かん。」と忠告されていた。それが「をりあひ」の章で、初野の下宿を訪ねても主婦の虚言でなかなか会えなくて誤解が生じた後、泥酔して下宿に帰る辺りから変わってくる。その後、初野の下宿を訪れる「わかれ」の章は、姉を殿井の世話にならせようと妹お波と主婦が相談していると、酔っぱらった東吾がやってくるという場面から始まる。

障子を開けると、背の高い、ネルの単物の間から胸の広いシャツを出して、紅い顔の東吾がのッそり起つて居る。

「お波ちゃんと云つたッけね？久し振だねえ。」と東吾は笑顔を作つたが、其の息は家中に溢るゝやうな酒の臭である。

（「わかれ」一）

初野と出会っても初野に

東吾様は大變に酔つて居るやうだ、私は此様な處を初めて見たが、矢張り不快の事が有るので、夫を紛らす為の酒であらう。天下の宿無し、浪人…、彼様な事を往来で高聲に

云つて居た、生家でも何処に居るか知らないと云ふ事であッた。

「あゝ此様な身持の方ぢや無かッたんだが！」と初野は涙ぐんだ。（「わかれ」二）

と思われる。実はこの直後東吾は初野に自分の想いを打明け、初野と付合うことになる。そうした重大事が、酒を飲んだ状態で行われたことには注目すべきであろう。

また初野が田端の東吾の隠れ家を訪れる「珍事」の章でも今まで酒でも飲んで居たものと見える。初野は、室の様を一目覗くと顔を顰めて、我にも無く溜息を吐いたが、

「彼様なに云つても、矢張し止められ無いと見える……。」

と獨語を洩した。（「珍事」一）

この後初野がいみじくも「ですけれど、何時参ってもお酒を飲がッて在らッしやいますのね。」と告げたとおり、東吾は作中の後半に登場したときは大概酒を飲んでいる。そこにはいくら東吾が否定しても、法学士になることを放棄した事への不安が当然ある。人生の落伍者として描かれていた兄と東吾がいつの間にか重なるようになっているのである。意地の悪い見方をすれば、初野への言葉の大部分は酒の力を借りてのことであり、素面の時の東吾は常に後悔の念があったのではないだろうか。

「お互に希望を達するには、何様な辛苦をも忍ばう、マレーヂする迄は、互に訪問する事も慎まう……、貴女は斯うまで云つた人だ。」

「え、夫は申しましたとも……、今だッて、其の心に變りは御座いませんわ。」

「あれを聽いた時は、僕は非常に貴女を頼母敷く思った、実に確乎してると思つて感心した…、けれども、今思へば、彼は單に口頭だけの事なんだ、貴女には決心も覺悟も附てるんぢゃ無い。」

「では貴方は、口から出放題に、心にも無い事を云ふ者と思召して？」

「其様な事ぢゃ、僕は到底駄目だと思ふ。」と東吾は、自分の云ふ事のみを云ひ続ける、「希望も理想も有つたものぢや無い、お互の前途も察するに難からずだ、其様な事では、寧ろ、今の中に關を絶つた方が可い、其の方がお互の幸福かもしれない…。」（「珍事」一）

東吾がこう初野を責める時、これは東吾自身に向けての言葉でもあった。だからこそ東吾は両親達の説得に「はい。何卒ぞ、此迄の罪は宥して、芳江様と結婚さして戴き度いのです！」（「立聞」三）との返事をする。それは解釈の余地は残るにせよ（お宮が企んでいたとされるように、取り敢えず夏本家の婿となり、芳江が死んだ後初野を後妻に迎えるとか）、夏本家を継ぐことであり、一度捨てた法学士の道を再び選択することである。

恋人を捨て、その代わりに資産のある家を継ぎ法学士になる、これらは全て『金色夜叉』の間貫一が捨てたもの、逆に言えばお宮が選択したものである。しかしお宮は貫一を捨て財産をとったことをすぐに後悔するが、『魔風恋風』において後悔し、最

後に死ぬことになるのは東吾ではなくて初野の方であった。そして初野の裏切り、新しいヒロインとしての可能性は結果的に先に触れた「良妻賢母」という国家が示した枠組みから飛び出そうとしたものでもあった。そうした逸脱は死をもって、しかも

「済みません、宥して下さい！」と初野は東吾の手を探し捉へたが、静に我が胸の上に持つて来て、其手と芳江の手とを握合はせて、「お二人ともね、何卒ね、お二人とも、何卒……。」

と迄は云つたが、其後は聽取れなかッた。それが最後の言なのであつた。（「執持」二）

と死ぬ間際まで許しを請わないと償えないものになるしかなかったのである。

おわりに

『魔風恋風』は病院（初野の入院）で始まり、病院（初野の死）で終わる。物語の最初と最後を空間的に連続させてしまい、さらには初野の時間はをそこで止められてしまうのである。そして初野の世間的な肩書きは、芳江や東吾が学校を卒業していくのと対照的に「女学生」であり最後まで変化はない。あれほど望んだ卒業試験を受けないまま、「女学生」のまま初野は初野は死んでしまうのだ。それは萩原初野という「女性」が新しい可能性を秘めながらも、その可能性を潰されてしまったことを意味する。初野にとって「堕落」は実は大した問題ではなく、初野の持つ新しい可能性、それが結局芳江の持つ旧式なヒロイン像に打ち負かされ、何ら発展し得なかったことが問題なのである。

黄金眼鏡のハイカラは　都の西の目白台　女子大学の女学生
片手にバイロンゲーテの詩　口には唱える自然主義
早稲田の稲穂がサーラサラ　魔風恋風そよそよと
（ハイカラ節）

などと『魔風恋風』は演歌に歌われた。「早稲田大学と地理的に近い目白の日本女子大学校の両者を歌いこんで、多少ヤッカミ半分に、青春の恋愛を羨望し、謳歌していたのであろう。」と神崎清は「魔風恋風の作者」（「大衆文学大系第二巻月報」講談社昭和四十六年六月）で述べるが、この作品には「羨望」される様な恋愛は無かった。ここで恋愛を成就するのは芳江であり、それは「女学生」という言葉に内包される新しさを持った初野ではなかったのである。

（注）

（1）単行本『魔風恋風』巻末に収録された「魔風恋風前編評判記」の「報知新聞」の項（論者が参照したのは明治三十七年五月八日付けの第四版だが、第二版の発行日が無く、三月十五日発行の第三版は記されていることから、恐らくは第三版からこの「評判記」は収録されたのでは

ないだろうか)。また中編、後編にも前編と同じ「魔風恋風前編評判記」が収録されている。

(2) 菅聡子「「魔風恋風」論—反不易流行小説の語るもの」(「近代文学論集」平成八年)や真銅正宏「小杉天外『魔風恋風』/通俗性の問題—明治大正流行小説の研究(二)—」(「言語文化研究」平成七年)など。

(3) 「自画像のレッスン—『女学世界』の投稿記事を中心に」(『メディア・表象・イデオロギー』平成九年 小沢書店)

(4) この『都の夢』の主人公松乃も千葉出身である。柳浪は房総を舞台とした小説を何作か書いており、東京からの異文化流入が地方に如何に影響を及ぼしているかという点から初野の背景を考える上でこれらの柳浪作品は何らかのヒントと成り得るのではないだろうか。

(5) 村瀬士朗「変容する「金時計」—『虞美人草』論—」(「近代文学論集」第二十三号 平成九年十一月)

(6) 前掲村瀬論文や大森郁之助「『魔風恋風』」幻の〈義姉妹〉考」(札幌大学女子短期大学紀要 平成五年九月)などによると、この年齢で卒業できる学校は制度上なく、高等女学校なら十六、七歳、女子師範学校なら二十一、二歳が卒業年齢であろうことが指摘されている。

(7) 「病院」二の「友達の繊細な手を強く握つた」と初野が芳江の手を握る場面が当初は「友達の繊細な手を強く吸つた」と表現されていたことなどから、天外自身そういった同性愛的な文脈を後には排除しようとしていたと考えられる。

(8) 「「良妻賢母」への背戻—『金色夜叉』のヒロインを読む」(「日本文学」昭和六十二年十月)

※本文の引用は岩波文庫版『魔風恋風』前編・後編によった。

(あまのかつしげ/本学大学院博士課程)